

フィロストラトスの「構想力」(二)

深 田 康 算

五

アポロニウス傳第六篇第十九章からして吾々に取り疑もなく明らかである所のものは、フィロストラトスがフワンタシア Phantasia なる語をミメシス Mimesis と對立せしめ彼を以て是よりもより優れたる技術者である Phan asia……sophōtera mimēscōs dem-iouigōs と見做してゐると云ふ事實である。フワンタシアが斯くの如き關係に於て用ゐられてゐることそしてミメシスと對立せしめられてゐることはそのこと丈けでも己に「此言説が全然孤立的なるものであることを除外しても」驚くべきことであり、少くとも問題とせらるべき丈けの價值を持つてゐる。孰れにせよ誠に注意すべき事實であること云はなければならぬ。

此事實からしてしかしフィロストラトスを以て「創造的構想力」の概念を打建てた最初の人であると論斷するためには吾々の見る所に據れば尙甚だ多くのものが欠

けてゐる。成程ミュライやキユルベの指摘してゐるやうに此對立は此所で極めて劇的に説き進められてゐる。未だ曾てあらざりし新説を提唱することの明らかなる意識の下にフワンタシアが説かれてゐる。しかのみならず、ブツチャーやサンデイスが述べてゐるやうに、フワンタシアなる語は成程アリストテレスの用語例に従へば感覺的知覺 *aisthesis* に對して其れから區別された所の再現的具象心像を意味するものであるからして、フィロストラトスに於ける此語の用法は全然從來の慣用例を破るものとも云へる、従つて又全然新らしき意味が彼れに依りて此語に附與されたのであるとも云へる。しかしながら此二つの事はそれだけでは要するに唯外面的なる事實に過ぎない畢竟唯フワンタシアなる語がミメシスなる語と對立せしめられてゐると云ふことだけに過ぎない。フワンタシアに「創造的構想力」の概念の確立の意義が認められたるためには、人は先づ此語が果して如何なる特別な意味をフィロストラトスの手から受取つたのであるかを検査しなければならぬ。しかしして此點に就ての多少の検査は恐らくは吾々をしてフィロストラトスに何等かの劃期的效績をも認めることを躊躇せしめるに終るであらう。

フワンタシアなる語はフィロストラトスに依りて藝術的創作能力としてミメシ

スに對立せしめられて居る。云はゞ「創造的構想力」Schöpferische Phantasieの意味に於て用ゐられてゐると解釋しなければならぬかのやうである。而して又此用法がアリストテレスの用語例に従はざるものなるとも云ふまでもなく明らかであるやうである。アリストテレスに據ればフワンタシアはアイステシスの弱きものとさへも云はれてゐる（修辭學第一篇第十一章六節）そして假令「修辭學」に於ける此規定は彼れの「精神に就て」De Animaに於けるフワンタシアの定義と全く一致するものとは云へぬやうであるが、想像力（若しくは形象力）を以て感覺的知覺よりして生ずる所の一個の運動なりとする其定義と「精神に就て」第三編第三章）必しも矛盾するものではないと云へる。孰れにせよアリストテレスに於てはフワンタシアは嚴密に云へば感覺的知覺からは區別せられなければならぬ所の、しかし感覺的知覺なしには生じえぬ所の Einbildungskraft 想像力若しくは形象力を意味する。斯くしてフワンタシアは感覺と記憶との中間に位する作用なのであり、そして斯かる作用としてそれは自ら思惟作用に關與することができるのである。（コープ「アリストテレスの修辭學」E. M. Cope, The Rhetoric of Aristotle, 1877, Vol. I. 205—6 參照）。

フワンタシアがアイステシスと同一ならざるものであると云ふ點からして、其れ

の所産たる具象的心像が感覺的表象と屢大に異なること、云はゞ自由なること、若しくは尙一步を進めて云へば創造的なることが注意せられてゐる。「感覺的表象は例へば視覺の力若しくは實際見ると云ふ働きなしにはありえない。しかるに内的具象心像は例へば夢の中なる心像に於ける場合の如く假令此等の孰れもが欠けてゐる時に於てさへ現はれうる。又感覺的表象力アイマスプレシブは常に物に應じて必ず働くのに反し、想像力ファンタジーはさうでない（精神に就て）第三篇第三章四二八a六—九。「想像力は内的状態であり吾々自ら之れを左右することができ、吾々の欲するに依りて之れを働かしめることができる。感覺的表象は之れに反して吾々の力の下に置かれては居らない。何故ならばそれは必ず眞なるか若しくは僞なるか孰れかでなければならぬ。からである。尙又吾々が極めて恐るべきもの若しくは又多少なりとも恐るべきものを目のあたり表象する場合に於ては吾々は直ちに之れがために心を強く震撼せしめられる。之れは何等か多少大膽と思はれる如きものを表象する場合に於ても同様である。想像の場合に於てはしかるに之に反して吾々は其等に對し、例へば吾々が其恐ろしきもの又は大膽なるものを繪畫に於て眺める場合に於ての如き態度に立つ（精神に就て）同上四二七b一七—二四）。

しかしながらフワンタシアがアイステシスとムネメとの中間に位する作用若しくは能力であり、そして斯かる作用として思惟イイイに關與するものである點から云へば、フワンタシアはアイステシスのそのまゝの模寫でなければならぬ。唯單に「弱き」アイステシスでなければならぬ。想像的心像が感覺的表象と異なることは即ち其れが寧ろ誤謬に向ふことに外ならないのであり、彼れと異なるを愈大なれば其誤謬も亦愈大とならなければならぬことゝなる。否フワンタシアがアイステシスと同じものでないと云ふことそのとの中に己にフワンタシアはフワンタシアとして其自ら誤謬でなければならぬことが含まれてゐるとも云へる。アリストテレスがフワンタシアとアイステシスとの差異を列擧してゐる中に、上に掲げた所のものに續いて、次の事を云つてゐるのは此意味に於て誠に興味深き者と云はなければならぬ。「アイステシスに依る所の者即ち感覺的表象は常に眞である。之れに反してフワンタシアに依れる心像は最大多數の場合僞である。加之吾々が感覺の對象を十分なる鋭さを以て注視してゐる場合には吾々は其對象例へば一個の人間が吾々に想像力に向つて與へられてゐるなどゝ云はない。想像力に或物が現はれると云ふ云ひ現はしは寧ろ吾々の感覺力が鋭敏に働かぬ場合に就て用ゐられるのであ

る。尙終りに、内的具象心像は、己に上にも云つた如く、眼を閉ぢてゐる際にも現はれると云ふことを注意すべきである〔同上四二八 a 一—一六〕。さうであるからして、アリストテレスに於けるフワンタシアは一面に於ては感覺からして思惟に到る中間の媒介的役目を持つてゐる（—を以てそれがフワンタシアの固有の役目なのである—）しかし一面に於ては、それ故に感覺と同じものではないことに基いて、其れは虚偽なるものとせられる。（此所に—詳しく云へば、フワンタシアが自由であることも如何にして虚偽たるものでないことをうるかに—恐らく形象力と云ひ想像力と云ひ若しくは又創造的構想力と云ふものゝ一般的體系の問題が潜んでゐるのであると云へやう）。孰れにせよフワンタシアはアリストテレスの—従つて古代一般の（そして又必ずしも古代のみには限られざる）—用語例に於ては感覺と記憶との中間に位する能力であり、思惟に關與する所の從屬的能力である。そは少くとも決して藝術的創作能力を意味するものではない。

さうであるからして、此語をフィロストラトスが藝術創作の能力として用ゐてゐることは一見全く獨創的見地を打開せるものなるかの如くにも見える。しかし藝術に就て彼れが此語を用ゐてゐると云ふ唯一つの點を暫らく除外してフィロスト

ラトスの掲ぐるフワンタシアなる語をそして其意味を検査して見るならば吾々はむしろ彼れのかくも劇的に説き出し來れる所のフワンタシアなるものが遂にアリストテレスの—上に吾々が引照した—見解以外實は何等新らしきものをも齎らせるものでないことを知らなければならぬ。此事はそのために吾々が特に上に引いたアリストテレスのフワンタシア論とフィロストラトスが説いてゐる所のものとを比較する何人にも直ちに觀取せられるであらう。ブツチャーやサンデイスの如きは共にアリストテレスが藝術に就てフワンタシアを説かないのにフィロストラトスが之れを其れに就て説いてゐると云ふ點其點だけに惑はされて後者の説く所のものと前者の説く所のものとが如何に相符合せるものなるかを注意しなかつたのである。

彼と是との間にはしかし云ふ迄もなく見逃すべからざる一つの相異がある。それは即ちフィロストラトスに於てはフワンタシアが藝術に就て云はれてゐると云ふ點である。換言すればフワンタシアが虚偽なるものではなくしてむしろ「見る」所のものを實在するものからの類推に依りて想像する「方」だとせられてゐると云ふ點である。此相異は、しかしながら、若しも本當に此所に相異が認められなければなら

ぬとするならば、アリストテレスはフワンタシアをフワンタシアとしては最大多數の場合虚偽であるとしてゐると共に藝術を以て其儘虚偽であるとしてはゐないのであるからして、そして藝術が虚偽でないのは實にそれがミメシスたることに基づくと思倣してゐるのであるからして、恰も此ミメシスに對立せしめてフィロストラトスが藝術に就て云つてゐる所のフワンタシアなるものが又本當にミメシスとは全く異なる原理若しくは能力なのであることの上に基かなければならない。さうでなければ此相異は唯言葉の上の相異たるに止まらなければならぬからである。問題はそこでフィロストラトスの所謂フワンタシアは果してアリストテレスの所謂ミメシス以外何等か新らしきものを含んでゐるのであらうかに移る。

六

此所で忽ち吾々の注意に上ぼつて來る所のものはプラトンに依りて學術語とせられアリストテレスに依りて踏襲された所のミメシスなる語の有する極めて廣い意味である。若しフィロストラトスが孰れかの語を慣用例に反して新らしき意味に用ゐたと云ふことが云はれうるとするならば、それはフワンタシアではなくしてむ

しるミメシスであつたと云はなければならぬであらう程、それほどミメシスを單なる模倣「見た所のものを描き出すこと」¹と取ることは異例なのである。フィロストラトスの説く所に従へばミメシスとは實は唯「見た所のものを嚴密に云へば唯「見る所のものを」²寫す力であり、つまりそれはアイステシス感覺的表象力より他の何もでもないのである。さうであるからしてフィロストラトスが用ゐたフワンタシアなる語に何等か新しみのあるが如くに見えるのは、彼が此語をミメシスに對して用ゐるとして恰も其ミメシスを以て單なる模倣若しくはアイステシスと規定してゐるのに基く。換言すれば彼れがミメシスをプラトン及びアリストテレス以來の用語例に反したる意味に於て用ゐてゐると云ふことに基く。若し吾々が單に彼れの用ゐてゐる言葉に捕はれることなくして、むしろ如何なる意味を其等の言葉が持つてゐるのであるかを注意するならば、吾々は多くの學者の陥つた誤謬から脱して、フィロストラトスに依り與へられたフワンタシアとミメシスとの對立が實は何等獨創的なる見地の打開でもないことを觀取することができよう。彼れの名づけてフワンタシアと呼ぶ所の能力は畢竟プラトン及びアリストテレスがミメシスと呼んだ所のもの以外の何物でもないのである。

フイロトストラトスがフワンタシアを其れに對せしめてゐる所のミメシスなるものがアリストテレスの所謂ミメシスではなくむしろ其所謂アイステシスに過ぎぬと云ふことは明らかであらう。それは(心に依れる)内部的模倣ではなく況んや(見ざるもの)を(實在するもの)の類推に従つて創造する構想でもなくして、唯目に見ゆる所のものゝ其儘の模倣とせられてゐる。しかし此ミメシスは其れが内部的(心に依れる)模倣と區別せられ、むしろ外部的(手に依れる)模倣と同一視せられてゐる點に於て、恰も何等か藝術的描寫を意味するもので、あるかの如く見られるけれども、實は全然藝術的模倣とは關係なき單なる感覺的表象に外ならないのである。ミユラーの考へた如くにフイロトストラトスはつまり三つの者を區別してゐるとも云へる。

一はフイヂアスがゼウス像を造つた場合に於て働ける如き(見ざるもの)を(實在するもの)の類推に従つて創造する構想力、一はチマンテスの(アイアコス)を畫家ならぬ人が見る場合に於て働いてゐるのでなければならぬ所の内部的模倣力、さうして一は(目に見ゆるもの)の忠實なる模倣。そして此第三のものがフイロストラトスに依りてはミメシスと名づけられてゐる。しかし此の如きミメシスは云ふ迄もなく吾々の單なる感覺的表象の意味に於てのみ(見ゆるもの)の忠實なる模倣と云へる丈

けであつて、斯の如きミメシスが藝術的描寫に其儘ありうると考へるのは藝術的模倣に就ての反省の欠如を曝露するものと云はなければならぬ。さうであるからしてフィロストラトスが慣用例を破つてミメシスと云ひ又フワンタシアと云ふのは傳統的藝術思想以上に彼れが出たことを示すものではなくしてむしろ其れ以下に落ちたこと若しくは其れ以前に戻つたことを證するものなのである。

ミメシスがプラトン及びアリストテレスに於て決して「見ゆるもの」の單なる忠實なる模倣とせられてゐないと云ふことは明らかであらう。プラトン及びアリストテレスの所論に就ては今再び此所に説く必要はない。又古代美學思想に於てミメシスが一般に唯單なる模倣としてゝはなく寧ろ「見ざる所のもの」を實在する所のものからの類推に依りて想像するものとして受取られてゐたことの例證も今一々之れを引照するまでもあるまい。

以上の如くであるからして、吾々はフィロストラトスの「構想力」に關してはユーリウス・ワルター及びクローチエの見解に賛同して、此「新説」を以て實はアリストステレスのミメシス説以外に出づるものではないと斷じうると考へる。Julius Walter, *Geschichte der Aesthetik im Altertum*, 1893 S. 791—794. B. Croce, *Esthétique comme science de l'express-*

ion et Linguistique générale, trad. Bigot, 1904, p. 167°

以上述べた所からしてフロストラトスの「構想力」の價值——若しくは無價值——が明らかであると共に彼れが如何にして此言葉を用ゐるやうになつたかの關係も亦略明らかであらう。彼れが特にファンタシアをミメシスに對して説かうとした所の動機に至つてはそれはつまり藝術即ミメシス説——如何に此語が廣義に用ゐられるにせよ——に對する正當なる不滿の中に在ると解する事もできないではない。しかしさう解するのもフロストラトスに對しては已にあまりに大なる恩惠であるであらう。彼れの言説は要するにソフィストの修辭的仕業しわざに過ぎないのである。美學思想史の上に何等かの跡を残すために其れには殆んど總てのものが欠けてゐる。それは唯偶、近代的思想からして始めて産み出された所の構想力の概念に親炙せる者の回顧に於て好奇心の下に一度は取り上げられそして檢査さるゝのに價するだけのものだつたのである。加之單に用語例の上からのみ見るとしても、近代に於いて藝術に關して構想力 Phantastic なる言葉が用ゐられるやうになつた事が何等かの關係に於てフロストラトスに負ふ所があるであらうと云ふことは考へられぬこと

であらう。しかし此點に就ては尙後の研究を待たなければならぬ。(完)

〔附〕「構想力とは模倣力よりもより優れたる技術者である。模倣力はその見た所のものを藝術に於て描き出す事ができる。構想力はその見ざりし所のものをさへも描き出す。何故かなら、それは見ざる所のものを實在するものからの類推に依り想像することをするからである」²⁾(アポロニウス傳第六篇第十九章 *Karyon* Vol. I. P. 231. 1. 2—4)

右の個所の譯は上述する所に従ひフィロストラスの詭辨的意圖を剝脱して書き改めるならば次の如きものとならなければならぬ。

「想像力(即ちアリストテレスの意味に於けるフワンタシア)は模倣力(即ち感覺的表象力即ちアリストテレスの意味に於けるアイステシス)よりもより優れたる技術者である。模倣はその見る所のものを描き出すことができる。想像力はその見ざる所のものをさへも描き出す。云々」

興味あることはワルターが與へた此個處の譯とキュルベが與へてゐる其れとの比較である。

J. Walker : Die Vorstellung (Phantasia) ist eine weisere Künstlerin als die Nachahmung. Die Nachahmung bildet nur was man sieht, die Vorstellung auch was man nicht sieht, und sie bezieht es auf die Idee des Dinges selbst.

O. Külpe : Die Phantasie.....eine weisere Künstlerin als die Nachahmung... Denn die Nachahmung wird nur gestalten, was sie gesehen hat, die Phantasie auch das nicht Gesehene, indem sie es sich vorstellen wird in Beziehung auf das Seiende.

ワルターに従へば「模倣は今日の前に見る所のものを表象する、想像力は今日の前に見ざる所のものを表象する」のである。しかして今日の前に見ざる所のものを何に基いて表象するかと云へばそれは其物の觀念に基くのである。此解釋が正當なるべきことは己に述べた所からして明らかであらう。PhantasiaをVorstellungと譯すことに對してはワルターの他の二三の譯語に對しての如く或は多少の批難がありうるであらう。しかし意味の上から云へば誤りでは決してない。彼自身のと云ふ如く「Nicht der Nachahmung tritt in der Wahrheit, wie der Wortlaut es erscheinen lässt, die Phantasia gegenüber, sondern der Nachahmung des akut Sichtbaren eine solche im Vorstellungsprozess. (op. cit. S. 794)

キユルペに従へば模倣は經驗に與へられたるものゝ忠實なる再現として曾て一度見られたるものを描き出す、創造的構想力は未だ曾て經驗せざりしもの未だ曾て見しことなきものを描き出す。しかし其れに基いて創造せられる所のもの *das Seiende* は即ち經驗 *die Erfahrung* であること云ふ。模倣と創造的構想力とは即ち想像力の中に於ける再現的と創造的、聯想的と構成的との區別に相當するものとせられる。此文をかく譯すことはできる、加之かく譯すことにより興味あるものとさへなる。此區別がしかし此所で吾々の問題とした所のものに何等の關係なきことは云ふまでもない。従つて此譯の當らざることも亦明らかでなければならぬ。蓋しそはキユルペの思想を述べたもので、フィロストラトスの正當に意味しえた所のものではないからである。

「今見る所のもの」と云ふと「見られし所のもの」と云ふと孰れが正しいか、又「今見ざる所のもの」と云ふと「未だ見ざりし所のもの」と云ふと孰れが正しいかは夫れ夫れ *ho eiden* と *ho me eiden* とに對する譯語として唯全體の意味の上からのみ決せらるべきであらう。しかし「實在せるもの」 *to onta* は到底「經驗の」と譯さるべきではない。そは「物の觀念」でなければならぬ。ゼウスの像を造らんとする者がゼウス

と共に天や四季や星辰をも見なければならず、アテナを造らんとする者がアテナの姿と共に戰場や智慧や諸技術やを見又如何にしてアテナがゼウスの頭から躍り出でたかを見なければならぬのは經驗との類推に依つて造ることが必要なるがためだからなのでなくして、其等のものゝ觀念に従つて造られることが必要であるからなのである。